

島崎藤村『ある女の生涯』論

——曖昧性が描く〈古い〉と〈狂気〉

佐々木 亜紀子

はじめに

島崎藤村の『ある女の生涯』^①は、一九二二（大正一〇）年七月に『新潮 第三十五卷第一号』に掲載された。発表当時から好評であったというが、今日においてもいくつかの興味深い問題を投げかける作品である。その問題とは、大きく二つが挙げられる。

ひとつは、配偶者を亡くしたあとの高齢女性の生き難い晩年を、ごく早い時期に描いている点である。現代日本でこそ、高齢社会の現状から配偶者のない高齢女性が注目されているが、一九二一年に小説の主人公として登場させたのは慧眼といえよう。

そして今ひとつの問題は、女性の〈古い〉と〈狂気〉とが主人公に寄り添って描かれ、病める精神を物語化している点である。ここには『ある女の生涯』の〈曖昧性〉が深く関与していると考えられる。

先行研究では、藤村の実姉高瀬園（または「園子」「その」という実在の女性が『ある女の生涯』の主人公のモデルであることから、モデルと作品との関係が注目されてきた。また、高瀬園は『ある女の生涯』よりまえに、既に藤村によつ

て「家」などで描かれているため、それらの作品と比較されたり、(「狂気」というモチーフで「春」と「夜明け前」をつなぐ作品として藤村の文学的営為から論じられたりした。本論はこれら先行研究をふまえたうえで、(曖昧性)をもつテクストの構造に注目しつつ、高齢社会の現代から『ある女の生涯』を読みかえす試みである。

『ある女の生涯』には、主人公小山おげんが精神を患って、家族に看取られることなく精神病院で亡くなった晩年が描かれている。だがおげんは天涯孤独だったのではない。養子夫婦が継いでいるものの、番頭以下多くの使用人を抱えた小山家という大世帯の「御新造さま」でもあった女性で、東京には家族とともに暮らす弟たちがいる。むしろ現代に比べれば、親類縁者の多い部類に属する。しかし放蕩を重ねた夫が亡くなり、そのままに長男も亡くし、「最後の『隠れ家』」を求めて小山の家を出る。精神的に「発育の後れた」四〇歳になる独身の娘であるお新と、甥にあたる三吉と、付き添いの婆やを連れて、まずは蜂谷というかつての書生が営む病院へゆく。次に弟たちを頼って独り東京へでるものの、勧められて「養生園」へ入所し、そこから「根岸の精神病院」へ転院し、三年間その病院に過ごしてついに亡くなる。

モデルであった高瀬園もおおむね同様の晩年を過ごしたようである。西丸四方「藤村の秘密」など先行研究によれば、「音羽養生院」から「根岸の脳病院」に移った末に亡くなったという。

高齢女性の過酷な晩年生活は、現代のみの現象ではないことが理解される。身近な家族たちをモデルに作品を作り上げた藤村の自然主義的方法ゆえに、厳しい現実がはからずも活写されたといえよう。

一、「生甲斐」を求めた出立

『ある女の生涯』は「生涯」とはいうものの、おげんの晩年の三年あまりが作品内の時間になっている。加えて、末尾かくに「三年ほど経つて、おげんの容体の危篤」が病院から伝えられたことが語られるばかりで、最後の三年間はほぼ欠

落している。その意味でおげんの「生涯」は、蜂谷医院に滞在したごく短い時間のなかでの彼女自身による「回想」によって凝縮されることになる。

おげんの夫は「関係した芸者は幾人となくあつて、その一人に旦那の子が生まれ」たり、「酌婦に関係の出来た」り、「若い芸者」を「道連に」出奔したりしたという。「十年も他郷で流浪した揚句」に帰郷したもの、再び「復た若い芸者に関係した」りと、「人の好い性質と、女に弱いところを最後まで持ちつゞけ」た。その不実な夫が小山家で亡くなる。「ある女の生涯」は、その二年後におげんが小山家を出た八月から始まる。

「あの旦那が亡くなつてから、俺はもう小山の家に居る気もしなくなつたよ」、「旦那が亡くなつた時に（中略）俺はもう小山家に縁故の切れたものだと思つた」と弟に語るおげんのことばから、「待つても、待つても、帰らない夫ではあつても、おげんを小山家に引き留めていたのは夫であつたことが判る。「小山の家の祖母さん」や、「相続人」である「実子の死を見送」つたときは異なつてゐるのだ。「家も捨て、妻も捨て、子も捨て、不義理のあるたけを後に残して行く」夫の度重なる裏切りに、「小山の家を出ようと思ひ立つ」ことが二度あつたとはいへ、結局おげんは「旦那の死をも見送」るまでは、小山家にいることを選んでいた。こうして二度企図してかなわなかつた末に、「俺は半年も前から思ひ立つて、漸くこゝまで来た」と今回の小山からの出立を独り言つところに、おげんの決心のほどがうかがえる。長い準備の末に、自ら選んで小山家をあとにしたのだ。

年老いて自ら家をあとにする女性といへば、『楡山節考』のおりんが想起される。しかしおりんとおげんとは全く異なる世界を生きている。『楡山節考』では、極貧の村に暮らすおりんが、よく食べられる歯をもつことを恥じ、村人への「振舞支度」をしたうえで「楡山さま」へと旅立つ。息子と孫に嫁がきて、食物の消費量が生産量以上になる日が目前に迫つたため、おりんは自らの意思で共同体の慣習に従つたのだ。需給の不均衡を是正するかのようなおりんの行為は、村や家族の重荷になる（古い）の時間を短縮して、有用な生から死へと最短距離をゆくともとれる。おりんには「楡山さま」とい

う他界の救いが信じられたのかもしれない。

棄老という習俗について、赤坂憲雄は「棄老伝説考——秘められた供饗譚のなかへ」⁷⁾で、近代ヒューマニズムに偏向した従来の「姥捨て譚」の説明⁸⁾を批判して、家族制度などとの関わりから日本の「棄老伝説」の固有性を探った。そのなかで赤坂は次のように述べる。

棄老伝説の前段に（中略）老いという、生／死のあわいに横たわる曖昧な境界の時間を、ひたすら引き延ばすことを志向してきた近代の老人観、さらにいつて人間観とは根柢から対立する何かが確実に潜んでいる。たとえばそれは、老いと死のはざまに猶予された黄昏の時間をかぎりなく無（傍点は原文に拠る）に近付けようとする共同の意志であり、老いを生から鋭利に切断し、死の側へと境をこえて人為的に逐い放とうとする不可視の力である。

さらに赤坂は続けて、「棄老伝説は失われた歴史の、ほんの幽かな、共同化された記憶の痕跡^{あと}であり、「老人殺しを秘められた主題とする一篇の供饗譚」であると論じた。「他界なき時代を生きてあるわたしたち」が抱く「近代の老人観」からはみえにくい「安らぎ」「救済」が「山に乗て、／山に行く」（傍点は原文に拠る）ことにあるとすれば、「檜山節考」のおりんの迷いのない訣別の姿は腑に落ちる。

だがおげんは「他界なき時代」を生きている。住み慣れた土地を自らあとにするおりんとおげんだが、おげんにはおりんの信じた「檜山さま」という他界はない。また「金銭の勘定に拙」く、家族の経済的な重荷になるのを厭うという発想がない。そしてなにより、おげんの出立は「もつと生甲斐のあることを探したいと心に思」い、実弟たちを頼って「隠れ家」での自立した生活を夢見て東京をめざしたものだ。そこにおりんととの決定的な違いがある。

そして当然ながら東京は「檜山さま」のようにはおげんを受け入れてはくれない。おげんが小山家を出て弟たちに依存

しようとするのは、血縁や互恵関係を頼みにしたのであろう。だが東京では、養子にいった二番目の弟の直次が養母や子供との六人家族で暮らしている。そこに藤村がモデルと思しき三番目の弟で「外国の旅から帰つたばかり」の熊吉が二人の子供とともに同居していた。「儉約にして暮しても居」る彼らには、経済の面からもおげんを支える力はない。

もちろん、高齢になつて配偶者や婚家からやつと解放され、「もつと生甲斐のあることを探したい」と、おげんのように考えることを一蹴することはできない。高齢者を画一的なイメージに押し込めようとするのは、ともすれば若年者からの横暴ともなり得る。たとえば熊吉の「あの養子を助けて、家の手伝ひでもして、時には姉さんの好きな花でも植ゑて、余生を送るといふ気には成れないのですかなあ」ということは、小山家にとつて都合がよく、自分たちに負担がかからない（古い）のイメージを、姉にあてはめようとしているに過ぎないといえる。

しかしながら、おげんの出立には（曖昧性）がつきまといつている。「半年も前から思ひ立」つたとおげんは言うが、弟たちの暮らしぶりも確かめぬまま小山家を出てきてしまふとはどういふことなのか。この疑念は読む者を戸惑わせる。おげんの言ひ分を離れて、客観的に考えれば、やはりおげんの判断力が低下していたといえるだろう。

二、出立をめぐる別の思惑

無謀ともいえるおげんの出立に対して、小山家がおげんをどのような思いをもつて見送つたのだろうか。おげんに寄り添つた視点から語られている構造上、それは測り難く、（曖昧性）を伴う。小山家の家長たる夫と、「相続人」の長男を失つたおげんは、小山家にとつてもはや重荷、もしくは無用者になつてしまつたのかもしれない。^⑨

今日の高齢社会の現状から照らしてみればそれは容易に推察できる。おげんのように配偶者や実子より長命を保つていゝる高齢者は、医療技術の向上によつて現代日本ではむしろ多くなつてゐる。そのうえ核家族化によつて、おげんをとりま

くような兄弟や親族との繋がりが失われ、ある面ではより深刻な状況になっているともいえる。こういう現状での高齢女性が被介護者として置かれるときの課題のひとつは、配偶者や家督継承者を看取りながらも、自らは看取り手を確保できないということである。その要因は家族内での地位の失墜であり、そこには経済力と有用性が関わる。男性とは違って、配偶者や長男亡きあとの女性は、財産の多くを次の相続人に渡して経済的に逼迫してしまうのだ。また看取りの役目が終了したことで、無用者として居場所を奪われることにもなる。夫やその両親を看取することを妻の務めとして内面化し実行した世代の高齢女性が、自らは看取り手を確保できなくなっていることは珍しいことではない。そのうえ実子が亡くなっていれば、状況はより不利にはたらく。「ある女の生涯」は、かつての女性ではなく、現代の高齢女性の姿にも重なる。

話を「ある女の生涯」に戻そう。おげんは「嫁いで来た若い娘の日から、すくなくも彼女の力に出来るだけのことは為たと信じて居た」という。だがすでに家業を継ぐ養子夫婦のいる小山家でそれがどれほど評価されていただろう。

峰谷医院をでて東京へいくおげんのために、養子の兄がやってきて弟のもとに送り届けるとき、養子、甥、番頭、小僧、女衆など「小山の家の衆がみんな裏口へ出て待受けて」、上京する汽車のなかのおげんに向かって挨拶すらしている。一見、円満な出立とみえるが、裏を返せば、おげんの出立を引き留めた形跡がみえないともいえる。

彼女は家の方に居た時分、妙に家の人達から警戒されて、刃物といふ刃物は鋏から剃刀まで隠されたと気づいたことがよくある。年をとつたおげんがつくづくこの世の冷たさを思い知つたのは、さういふ時だった。その度に彼女は悲しさや腹立しさが胸一ぱいに込み上げて来て、わざと養子夫婦のいやがるやうに仕向けて見たこともある。時には白いハンケチで鼠を造つて、それを自分の頭の上に乗せて、番頭から小僧まで集まつた仕事場を驚かしたこともある。

ここからは、周囲からの奇異なまなざしを悲しむ感情がおげんにはあり、時に滑稽を演じてみせることもあつたと読み

取れる。しかしこれはあくまでおげんの側からみた世界でしかない。ここにモデルである姉への、藤村なりの思いやりに満ちた想像力が働いているのかもしれないが、おげんの側からの言い分ではない以上、小山家との不協和音の可能性は残される。

たとえば、おげんの知り得ない水面下では、小山家と東京の弟たちとの画策があつたとも考えられる。おげんは弟たちの暮らしぶりを知らないまま出立しようだが、小山家では直次の家の現状への見極めがある程度できたはずだ。少なくとも小山家の側は刃物を隠す必要性があると判断していた。「婆や」に会計を預からせていたのも、おげんに金銭の管理能力がないと判断していたからである。家事労働から排除し、経済的自由を奪つたのは、単なる嫌がらせではないはずだ。「養子夫婦のいやがるやうに仕向けて見た」おげんの行為や奇行を、〈狂気〉の兆候としか把握できなかったからである。それゆえに、おげんを引き留めることなく使いまで出して東京に送り届けたと考える余地はある。

要するに、小山家ではおげんを単なる無用者として積極的に追い出したとはいえないまでも、その〈狂気〉を危険視したり、もてあましたりしていたのだ。おげんの東京行きは、「もつと生甲斐のあることを探したい」という本人の希望を實現するためではなく、東京での「養生」をも企図されていたのではないだろうか。そのため、弟たちはおげんが到着してもなかなか「相談」にはのらず、「唯々姉の様子を見ようとはかりして居た」のだ。そして「養生園」に入ってから、小山の養子が「蔭ながら直次を通してずつと国から仕送りを続けて居た」のである。おげんの側から描かれた『ある女の生涯』は、背後におげんが知ることのできない別の相貌を隠しもっている。

三、〈狂気〉の側からの物語

現代において『ある女の生涯』が注目されるのは、冒頭でも述べたとおり、女性の〈老い〉と〈狂気〉とがその内面か

らも描かれている点である。しかし、そのためにテクストの欠落、あるいは〈曖昧性〉といえるような語り口になっていることは避けられない。すでに関谷由美子は『ある女の生涯』の「男と女のドラマ」の欠落を指摘し、そのためにおげんの生涯が「女の破産」の光景に塗り潰され^⑩たことを明らかにした。また、先述したとおり、小山家を出てきた理由が本人の希望だけとは断定できない曖昧さが残る。ほかに、おげんの精神疾患の原因は夫の病（梅毒）の感染なのか、父の遺伝なのか、あるいは性的抑圧なのか曖昧である。

加えて、おげんの側からの語りでは、病症が不明瞭でその〈狂気〉が重篤な状態とは受け取れないのである。このことは平林たい子が「この小説の余韻に気づかず^⑪に読んで行くと、病院に入れるほど病気が悪化してゐるといふことはわからない」と、つとに指摘している。たとえば、周囲から危険視されていることを気づき悲しむ感情や、興奮した時の「これは少しをかしかつたわい」という反省や、「何だか俺はほんとに^⑫狂にでも成りさうだ」という独り言は、現代から見れば、孤独からくるうつ状態や軽い認知症のつぶやきのようにも読める。

そのため、熊吉の行爲、すなわち、「養生園」への入院を強く勧め、次には欺いて「根岸の精神病院」に転院させたことはいかにも不当であり、おげんが理不尽な境遇へ陥れられた印象が強まる。つまりおげんの側から語られた『ある女の生涯』は、おげんへの同情をかき立てるように読者を導いてゆくのだ。

ところで、高齢者の精神疾患といえば、近年は認知症が取り上げられることが多い。精神科医の小澤勲は、認知症を生きたる人自身の声を拾い集め、その人から見た世界を「物語」として理解することによって、介護の方法や処遇の改善を模索している^⑬。『ある女の生涯』の時代、認知症という名称はなかったが、おげんという〈狂気〉の側からことばを紡ぎだしているのは注目される。おげんの側からの物語に分け入ることで、精神を病みつつ生きることの一端を理解する試みといえるのかもしれない。

先にあげたおげんのつぶやきや、「彼女の内部」の「独語を言ふ二人の人」の会話は、もちろん〈狂気〉の本人のみ知

るものなので、仮構された物語である。だが「彼女の内部」の物語によって、自身の精神状態に対して病感を抱く苦悩や、次第に正気を喪失していく不安にさいなまれる患者の哀しみに思いを致すことができる。また財産管理をされて「小遣ひ」を「ねだり／＼」することの屈辱や、家族全体から疎外される失望をも知ることができる。

また反対に、「彼女の内部」が描かれることによって、苦悩だけではなく、おげんの自尊心をも知ることができる。たとえば蜂谷医院に滞在中の「静かな日」が続いたところ、木曾川の「川岸から拾ひ集めた小石で茄子を潰けることを楽しみに思うのは、皆を「悦ばせ」、皆に「振舞ひたい」という気持ちがあつたからである。「パンを焼くこと」も「在院中の慰みの一つ」で、三吉を喜ばせ、患者たちへも配ることがおげんの自尊心でもあつた。それはかつて小山家の「御新造さま」であつたことの名残からかもしれない。家事能力の高さが、「女の破産に終つたとは考へたくない彼女の自尊心を支えたの

だろう。

だが東京ではそれが失敗につながつてしまう。「新物の里芋」を「うまく煮て弟達をも悦ばせようと思ふ」のだが、「や、昂奮」して「炭のつき方を教へようといふ心」が先走り、直次の妻のおさだに「熱い火箸」を掴ませてしまつたのだ。

【熱。】

とおさだは口走つたが、その時おさだの眼は眼面まなこにおげんの方を射つた。

【氣違ひめ。】

とその眼が非常に驚いたやうに物を言つた。

ここでおさだは「氣違ひめ」と言つたのではない。おさだの眼の表情から、解釈されているに過ぎない。おげんは相手の嫌悪感を読み取る能力もあるということだろう。得意な家事でアイデンティティを保ち名誉を挽回しようとした行為

が、逆に周囲との軋轢を生む。漬物やパンを配ることは過分な贅沢と解釈され、「教へようといふ心」は自分の能力への過信あるいは認識不足ととられる。そして「昂奮」は「気違ひ」の兆候とされてしまう。結局おげんの自負心からの行為は、彼女自身の評価を低めてしまったばかりでなく、入院措置という事態を招き寄せてしまったのである。

四、熊吉と藤村の間

『ある女の生涯』がおげんの側から語っているかぎり、「火箸」事件は、おげんにとって「弟達をも悦ばせよう」、「炭のつき方を教へよう」という意欲が裏目に出た結果だったと読める。だがここで注目されるのは熊吉の行動である。

「火箸」事件のあと、直次は「大袈裟な真似をするな」と言つて、「隣近所にまで響けるやうな高い声で笑つた」り、『大分面白かつたよ』と熊吉にも「話して無造作に笑」い、つとめて平静を装っている。しかし熊吉の態度は違つていた。

熊吉は黙し勝ちに食つて居た。食後に、おげんは自分の側へ来て心配するやうに言ふ熊吉の低い声を聞いた。

『姉さん、私と一緒にいらつしやい——今夜は小間物屋の二階の方へ泊りに行きませう。』

この晩、熊吉は姉と二人で相對し、その病状の重篤さを認識するに至る。「おげんの内部に居る二人の人が何時の間にか頭を上げ」、次に謡曲を「嘯」き、「ふと気がつく」と、熊吉はまだ起きて（中略）しょんぼりと電燈のかけに坐つて居るやうな弟の顔が彼女の眼に映つた」と、語りはおげんに寄り添う。だが熊吉からはまぎれもない（狂気）の徴と見えたのだろう。それゆゑ「翌日は熊吉もにはかに奔走を始めた」のである。

平静を装う直次とは違つて、熊吉は「火箸」事件を重大視し、「どうしても俺は病院へ行くことは厭だ」というおげんの

ことばとはうらはらに、「養生園行を見合せないのみか、その翌日の午後には自分で先づ姉を見送る支度をし」、「姉の前に手をつけて御辞儀した。それほどにして勧めた」のである。

おげんは「トボケ、でもしないかぎり、何の面をさげて、そんな養生園へ行かれようと考へ」、「わざと風変り」な体裁でかけたというが、それを故意の「トボケ」とするのは彼女の言い分ではない。「小山の家の方で毎年漬物の用意をするやうに」台所で蕪菜を「漬ける手伝ひ」をすれば、「そんな水いぢりをなすつちや、いけませんよ（中略）」と看護婦に叱られてしまう。おげんにとってそれらの行為は故あるものだと「ある女の生涯」は示し、精神を病む人の心を物語化してゆく。

野村章恒⁽¹⁴⁾によれば、おげんのモデルである高瀬園が入院した「音羽養生園⁽¹⁵⁾」は、呉秀三⁽¹⁶⁾の経営する「有福な自費の軽症者を開放的に治療する病院で」あったという。野村は精神医学の立場から「ある女の生涯」を分析してこのころのおげんの状態を「どうみても痴呆が相当進んでいたものとも考えられる」とし、「閉鎖病棟の根岸病院に転院せねばならない結果」を当然視している。

また高瀬園の養子高瀬兼喜（文吉）宛の藤村書簡（大正六年二月八日）からも、園の重篤な状態が察せられる。書簡には「姉のことにつきましては私も心を傷めて居ります。病勢もつもの一方にて養生所の方も遂々ことわられました。昨日は広兄方へ参り、根岸病院へ入院させることに相談をまとめ、其足にて西丸いさの許へいろくま依頼に参りました」とある。つまり園は「開放的に治療する病院」から退院勧告されるほどの病状だったのだ。

しかし「ある女の生涯」はあくまでおげんの側から描いていく。漬物の手伝いをしようとすらしている元氣そうなおげんが、「その夕方」に「熊叔父さんのお使」の「宗太の娘のお玉」の訪問を突然にうけ、「養生園から誘ひ出され」て「根岸病院」に転院させられてしまったと。もちろん退院勧告されたことは書かれぬ。そしてその「根岸の精神病院」はおげんにとっては「厭はしい記憶」のある「牢獄も同様な場所」であった。熊吉もそれを聞いている。その場所へ騙して入

院させたお玉や熊吉は、いかにも冷酷な悪役になる。

根岸の精神病院でもおげんの病症は重篤とは描かれない。「おげんの中に居る二人の人」が対話したり、幻想に入ったたりするような描写はあるが、単なる自問自答や回想的なもの思いとも受け取れる。「俺はこんなところへ来るやうな病人とは違ふぞい」と言い、病院へ送り込んだ車夫の虚言を悔しがるおげん。父が「座敷牢」で読んだ古歌も思い出し、娘のお新を思い「激しく泣くおげん。『ある女の生涯』はおげんの側から周囲の不当さを語っている。

そのあと『ある女の生涯』は唐突に「三年ほど」後の「おげんの容体の危篤」を告げ、「養生園以来、蔭ながら直次を通してずつと国から仕送りを続けて居た」のが「小山の養子」であったことを明かす。おげんの亡くなったのちに看護婦が語ったところによれば、病院では「よくお裁縫なぞ」をし、「お亡くなりになる前の日に、頭を剃りたいといふお話」があったという。弟の宗太も「大分落着いて居て、この分ならもうそろ／＼病院から出してあげてもい、と思つた」ほどであったと言う。『ある女の生涯』はおげん亡きあとにすら、他者のことばとしておげんの言い分を補強しているのだ。反して熊吉は臨終にもお通夜にも立ち会わないままで物語から排除される。こうして熊吉はおげんの語りからも、末尾の地の語りからも不当で不義理な弟とされる。

熊吉の行動について、小林幸夫は「精神異常に対する思考の制度が露出しているのである。弟達は、おげんの願いや訴えに全く反応しない」と指摘し、「おげんの自ら生きようとする条件と環境を求める自己明視的な意志は、その存在すら認められることなく葬られた」ことを問題とした。¹⁸小林の「一般の生活を送ることのできる可能性を封殺してはいけない、というメッセージを強く持つ、いわば今日的な提言をしている作品」として読むことを否定するつもりはない。「今日的な提言」と限定するまでもなく、当時から患者の人權や自己決定権は守られるべきものだったはずだ。

一九一九年に呉秀三らが関わった「精神病院法」が公布され、それ以前の「精神病患者監護法」の強制監置の観点から、「治療の必要性」が強調されたとはいえ、「パターナリステックな干渉」であったことは否定できない。¹⁹一九一九年とい

えば『ある女の生涯』が発表される二年前、すなわちおげんのモデルになった高瀬園が根岸病院に転院したのちである。藤村やその親族が園の処遇をめぐって、当時の「思考の制度」に支配されていたこともあり得るだろう。

しかし『ある女の生涯』という作品が、おげんの側に寄り添って語られているかぎり、おげんの「自己明視的な意志」には留保が必要だ。重要なことは、〈狂気〉の側から語られたものである以上、精神病院に入院せざるを得ないおげんの胸中は、無化の可能性をもつということだ。

先に述べたように、『ある女の生涯』にはおげんの知り得ない背景があることが推測される。小山家の対応や周囲のあつかい、おげんの精神疾患の重篤さは、おげんの語りの背後に隠されている。それは『ある女の生涯』の欠落や〈曖昧性〉として読者に提示され、別の相貌をみせている。平林たい子が「この小説の余韻」といったのは、ここでいう〈曖昧性〉に近いだろう。『ある女の生涯』はこの〈曖昧性〉を選びとるによって、〈老い〉と〈狂気〉の側と、それを看る／視る側との二つの世界を示しえた。熊吉は確かにおげんに対して無理解なうえ、おげんを騙し、その死水すらとらなかつた。だが『ある女の生涯』はその〈曖昧性〉によって、熊吉の行為の裏側にある然るべき理由を仄かに語っている。

そして藤村は、『ある女の生涯』でおげんに寄り添って〈老い〉と〈狂気〉を生きる心の襞を描いた。おげんに対して熊吉は冷酷だったが、『ある女の生涯』は、おげんの心の葛藤、不安、孤独、疎外感、失望、屈辱感、自負心、そしてその悲しみを語っている。熊吉と藤村との距離は遠く隔たっているのだ。

*本論では『ある女の生涯』の文脈を活かすために差別語をそのまま残した箇所がある。しかし本論は、差別を温存、助長すべきではないという立場であることをご理解いただきたい。

(1) 島崎藤村の作品、書簡は『新装版藤村全集』（筑摩書房、一九七三—一九七四）に拠る。ただし旧字体は新字体に改め、ルビは適宜省いた。他の引用も同じ。また傍点は特に注がなければ、引用者に拠る。

(2) 『新潮』当該号は、有島武郎「白官舎」との「二家創作号」で、「記者便り」によれば「二作は共に百枚を超ゆる長篇力作で、その為め二氏は約半年に亘る苦心と努力とを続け漸くにして脱稿せられた」ものであるという。次号（『新潮』一九二二・八）「記者便り」にも「予期の如く多大の歓迎を受けました」とある。また瀬沼茂樹は「発表当時極めて好評であった作品である。（中略）精神分裂の内的独白と幻視との狂的世界を如実に追求するところは、意外なほどに清新」と述べている（『解説』『現代日本文学全集』8 島崎藤村集）筑摩書房、一九五三）。他の同時代評などについては、小林幸夫「『ある女の生涯』——意志と自己統御」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇二・一〇）が既に言及している。

(3) 和田謙吾「ある女の生涯 宿業の終焉」〔『國文學』一九七一・四、佐藤泰正「『ある女の生涯』——『春』と『夜明け前』のはざまに」〕（『国文学 解釈と鑑賞』一九九〇・四）、東栄蔵「解説」〔島崎藤村全短編集 五〕郷土出版、二〇〇三・四）など。
 (4) 西丸四方「島崎藤村の秘密」（有信堂、一九六六）。同書の序文には「ゆかりのある老女たちから伝えられた昔がたり」であって、「考証的には決して厳密なものではない」とある。だが編者の西丸は「ある女の生涯」の「玉子」のモデルである西丸いさ（または「いさ子」）の息子である。そのため高瀬園の入院に関する点は信びよう性が高いといえるだろう。なお「ある女の生涯」には、「養生園」とあるが、実在の名称は西丸が記したように「音羽養生院」。

(5) 伊東一夫編『島崎藤村事典 新訂版』（明治書院、一九七六）の北小路健による「高瀬その」の項参照。

(6) 引用は深沢七郎「楢山節考」（新潮文庫、一九八七）に拠る。

(7) 『叢書・史層を掘る』Ⅳ 供饗の深層へ（新曜社、一九九二）。

(8) 赤坂は「柳田国男監修『民俗学辞典』「姥棄山 オバステヤマ」の項」、大間知篤三ほか編『民俗の事典』「姥捨て山 うばすてやま」の項」及び、「関敬吾の『日本昔話大成』第九巻の「親棄山」の項」を批判している。

(9) この件に関して、伊狩弘は「適当な病院もない木曾では病状を悪化させた園子の面倒を見切れなくなった養子達が、ようやく

帰国した藤村をあてにして入院させるために園子の上京を図ったというのが実情ではなからうか（『日本文芸論稿 第一八・一九合併号』一九九一・一一）としている。なおこの論については滝藤清義「ある女の生涯」——「狂」を描くということ（千葉大学大学院人文社会科学プロジェクト報告書一八四『日本近代文学と病』二〇〇九・三）を参照した。

(10) 関谷由美子「流浪する狂女」と二階の叔父さん——藤村「ある女の生涯」と「出発」（『文学における性と家族 梅光女学院大学公開講座論集 第44集』笠間書院、一九九九）。

(11) 平林たい子「ある女の生涯」について（『新潮』第四十五卷第十一号、一九四八、一一）。

(12) おげん（あるいは園）の病状については諸説ある。西丸四方は高瀬園の症状を「脳梅毒」ではなく「精神分裂病的」（現在の統合失調症）、「幻覚妄想性のもの」としている（注4に同じ）。北小路は「女狂いの夫から移された病毒のためか精神分裂症（一説）」（注5に同じ）とし、野村章恒（『森田正馬評伝』白揚社、一九七四）は「痴呆が相当進んでいた」としている。ほかにもPTSDの可能性が捨てきれないだろう。この件に関しては、心理学史研究者安齋順子氏のご教示による。

(13) 小澤勲「痴呆を生きたということ」（岩波新書、二〇〇三）、「物語としての痴呆ケア」（土本亜理子との共著、三輪書房、二〇〇四）、「認知症とは何か」（岩波新書、二〇〇五）など。なおこの件に関しては、大鹿貴子「たとえ記憶をなくしても 認知症の人々に残るころ」（米村みゆき／佐々木共編『介護小説』の風景——高齢社会と文学』（森話社、二〇〇八）を参照。

(14) 野村章恒「森田正馬評伝」。注12参照。同書によれば、根岸病院の関係者は既に物故し、カルテは「戦災で消失」したという。

(15) 根岸病院の森田正馬は、呉秀三の弟子にあたる。

(16) 鈴木芳次は社団法人東京精神病院協会篇『東京の私立精神病院史』（牧野出版、一九七八）で、氏家信の「東西医界先哲評伝（29）呉秀三」（『医事公論』一九三九・一二・二三）を引用して、「明治四十年」に呉秀三が開設した「音羽養生所」が「家族看護の療法を試み」たことを紹介している。また岡田靖雄も氏家の同文を引用したうえで、「家族的看護の療法」というよりは開放的処遇というほうがあっているだろう（『呉秀三——その生涯と業績』思文閣出版、一九八二）と述べている。なおこの件に関しては安齋順子氏と橋本明氏（愛知県立大学）の御教示による。

(17) 「いさ」は注4の西丸四方の母。

(18) 小林幸夫「ある女の生涯」——意志と自己統御（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇二・一〇）。注2参照。小林はこの論のなかで、

同様の論として瓜生清（「島崎藤村『ある女の生涯』論」（『福岡教育大学紀要（文科編）第四三号』一九九四・二））と大井田義彰（「主題としての『狂気』——『ある女の生涯』論序説」（『媒 第六号』一九八九・一二）の論を紹介している。

(19) 広田伊蘇夫『立法百年史——精神保健・医療・福祉関連法規の立法史 増補版』（批評社、二〇〇七）を参照した。